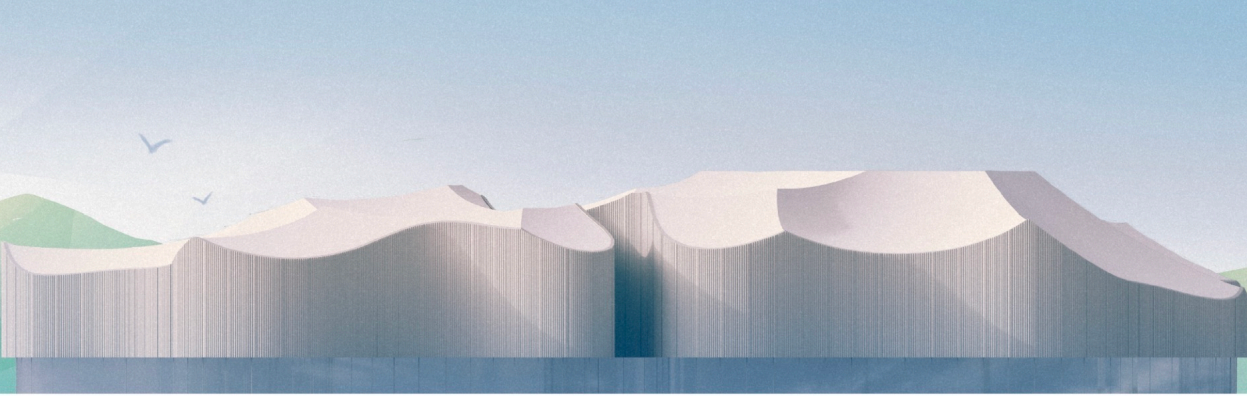


記憶をつむぐ、広場の山並み

音楽はまさに人々の文化的営みの蓄積ですが、自然は時としてそれらを一瞬にして奪い去ります。しかしながら、災禍から立ち直るきっかけを人間に与えるのもまた、自然への畏怖を源とする文化芸術の力です。広瀬川が大地を削ってできた河岸段丘の縁に位置する敷地を、人間と自然がまっすぐに見つめ合う広場としてとらえ、過去の記憶をつむぎ、未来へつなげるための、新しい山並みをつくります。



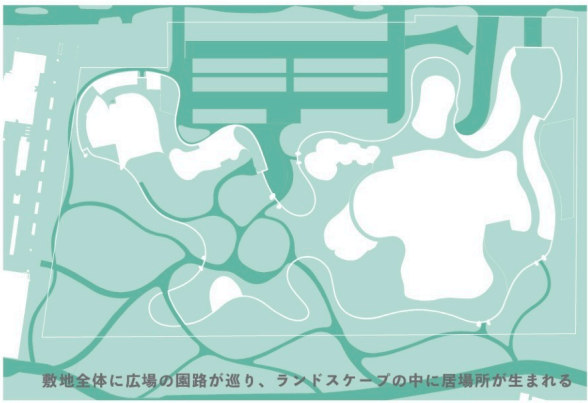
青葉山の新しい稜線となるシンボリックなルーフケープ

本建物は、仲の瀬橋や地下鉄東西線の車窓などからも見える広瀬川河岸段丘の縁に位置します。大ホールのフライタワー等を内包しつつ、その他のボリュームを立体的に削り取ることで、周囲への威圧感を低減します。青葉山の新しい稜線としてデザインされたルーフスケープは、シビックプライドのシンボルとなります。

設計の理念と考え“仙台はじまりの地から、次の400年へ”

敷地全体が広場、ランドスケープの中の劇場

本敷地は、**広瀬川の河岸段丘の縁**に位置し、**仙台市内を一望**する稀有な立地です。城跡や博物館、美術館、会議・展示場、大学施設、高校などが集まる青葉山エリアにおいて、18,700㎡もの広さを有する敷地は、今後二度と現れないかもしれません。伊達政宗が拓いてから400年の歴史を持つ**仙台市の次の400年**を想うとき、**都市の骨格をなす大きな広場**を作りたいと考えます。敷地全体が広場であり、大きなランドスケープの中に劇場となる場が立ち現れ、**大地と人間の営みを紡ぐ建築**を提案します。



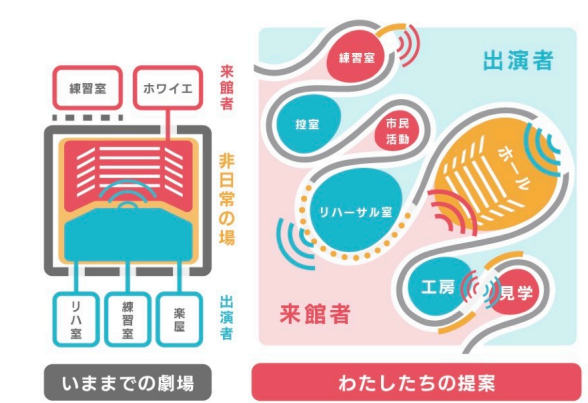
外部の環境を取り込み、内部の活動がにじみだす建築形態

劇場建築においては、そのプログラム状の特性から、箱型の建築の中にロビーがあり、もぎりの先にホワイエがあり、そのさらに奥にホールがある、という**入れ子状の箱型建築**になることが少なくありません。しかし、敷地全体を立体的な広場と捉えるならば、内部空間と外部空間は等価に扱われ、建築は**環境を知覚する触媒**として機能します。表面積を増加させるひだ状のプランは、**街へあふれだす市民活動のよりどころ**となり、**広瀬川や青葉山エリアの豊かな外部環境**を最大限に享受します。



演者と来館者の中で生じる大小さまざまな邂逅

旧来の劇場においては、**演者と来訪者が対峙する唯一にして最大の場**として、非日常の中にホールが位置付けられます。しかし本来の文化芸術の創造活動は、もっと**グラジュアルで多発的・偶発的**のものであり、演者と鑑賞者の**相対的關係も常に入れ替わり**ます。本提案では、**表動線と裏動線をひだのような可変的な壁で間仕切り**、日々の練習やセッション、サークル活動や発表会、またそれに伴うリハーサルや見学会の中で、**演者と来館者が様々なスケールや頻度、フォーマルさで出会う**しかけをつくります。



アマチュアの裾野を広げ、プロが世界の中で陶冶し合える音楽・芸術活動の場

練習室→リハーサル室→小ホール→大ホールと、**ステップアップして世界で活躍するための活動の場**を提供し、音楽・芸術活動の**裾野を広げるとともに、プロが世界で陶冶し合える施設**とします。

交通の結節点における屋外広場のにぎわい

本敷地は、**国際センター駅**（地下鉄東西線）、**桜の小径**（歩行者）、**国際センター駅・宮城県美術館前バス停**（バス）、**仲の瀬橋**（自動車）、**国際センター駅自転車等駐車場**（自転車）などが集まる**交通の結節点**に位置します。敷地南東の、**最も日当たりとビューがよいエリア**に**飲食可能な屋外広場**を設けることで、**エリア一体ににぎわいが連続**する計画とします。

災害文化を能動的に創造・発信するための舞台装置

災害を乗り越えるための知恵や術を持った社会文化を世代を超えて醸成してゆくためには、過去の災害に関する記録を**凍結的にアーカイブ**するだけでは不十分です。そこで、本施設を**災害文化にまつわる市民活動を能動的に創造・発信しく舞台装置**として位置付けます。その前提に立つと、**音楽ホールと中心部震災メモリアル拠点**は親和性が非常に高いプログラムとして浮かび上がってきます。

コスト縮減に関する提案

建設費の大半が決まる設計初期段階でのコストチェック+VE検討の徹底

設計・施工のフェーズにともなって試算、粗概算、精概算、明細見積と建設コストの確定度が上昇するにつれ、設計変更の労力に対するコスト縮減の効果は小さくなります。初期段階でのコストチェックと積極的なVE検討を行います。

地下躯体量の低減と上部躯体の軽量化

地下躯体の範囲を限定し、掘削土量や地下外壁の防水+二重壁範囲を縮小します。また、ホール部分以外の上部躯体を鉄骨造として軽量化し、上階に対して1階部分をセットバックすることで、**ピット面積も低減**します。

イニシャルコストとランニングコストのバランスを最適化した設備設計

設備機器の選定においては、イニシャルコストとランニングコストのバランスを鑑みる事が重要です。高効率な設備機器や制御システムの導入により、Zeb Ready水準を達成し、環境負荷の低減・消費エネルギーの低減によるランニングコストの縮小を図ります。また、屋根形状を活かした太陽光パネルの設置により、創エネも図ります。建設費だけではなく将来的なメンテナンスや維持・更新費用も含めた**ライフサイクルコスト**の中で最適な設備機器を選定します。

大規模改修を想定した設計上の配慮

設備機器の集約と更新ルートの確保

大ホール搬入口に近接して設備用ドライエリアを設け、大規模な設備機器の更新が容易な計画とします。

耐力壁と間仕切り壁の整理

構造耐力上必要なRC耐力壁以外は、ガラス間仕切り、メタルカーテン、CLT、ボード壁などの乾式壁とすることで、**将来的な間仕切りの変更や内装の改修を容易**にします。

外装材のユニット化

外装は、**仙台市の紋章をモチーフ**として、連続した円弧が嵌合する**PCパネル**とします。外装材をユニット化することで**品質の安定と施工性の向上**を図り、将来的な不具合箇所の改修や補修も容易にします。



設計を進める上で特に留意すること“ホールとメモリアルの融合と独立”

ホールとメモリアルが互いに呼応する動線計画

ホール機能とメモリアル機能は、**立体的な断面構成**の中で、ホワイエや吹き抜け、中庭を介して**互いに呼応するよう**に配置されます。ホールへ観劇に訪れた人が、**震災文化を担う市民活動の一端**を垣間見ようような直接的な相互作用から、**故人に想いを馳せるために訪れた人と終劇後に心を沈める人がただ隣り合っ**てに座っているような距離感まで、**多様な関係性を許容**するように、おおらかに空間を繋ぐ動線を計画します。

イベントの規模に応じて、同時使用・独立運用が可能なゾーニング

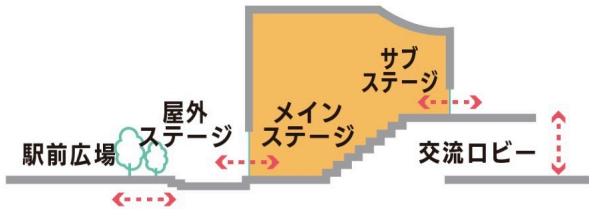
一方で、ホールにはメモリアル機能とは独立して、柔軟に運用することも求められます。もぎりの前後で**有料ゾーンと無料ゾーン**を明確にゾーニングしたり、**小ホールと大ホールまたは音楽リハーサル室と舞台リハーサル室の同時利用**に対応したりすることがホールエリアには求められます。そこで、各階にも**もぎりエリアとホワイエ**を設け、**イベントの規模に応じて複数階から入退場をスムーズに行える計画**とします。また、**ゆとりのあるラウンジ**を複数設け、**表動線・裏動線を切り替えて柔軟に運用**できるダイナミックゾーニングを採用します。また、練習室をリハーサル室の楽屋と兼用する、イベントの規模に応じて**もぎりの設置個所数を変更**する、イベント参加者の**男女比率に応じてトイレの仕切り位置を変更**する、**VIP動線を複数設ける**など、想定される様々な場面に対応できる計画としています。

桜の小径・青葉山の自然と連続するランドスケープ

桜の木を敷地内まで引き込み配植するとともに、**建物内外を貫く桜の小径**へとつながる動線を設けることで、**一体的な風景**を創出します。また、**潜在的植生を考慮した敷地内の植栽**は周囲の自然との視覚的にもつながり、生態系としての連続性を生み出します。

広場・ロビーと一体的に利用可能な3つの“ステージ”を持つ小ホール

小ホールには、より**実験的な仕掛け**を内包し、演劇や演奏における創造性を刺激し、より街やパブリックスペースに開かれた劇場のありかたを提案します。具体的には、**舞台上手を屋外広場へ全面的に開放し、屋外広場の中にテンポラリーな劇場**を出現させるとともに、**客席後方2階レベルにサブステージ**を設けることで、小ホール前後の立体的な演出や建物共用部を立体的に巻き込んだイベントにも使用可能な計画とします。例えば、**仙台すずめ踊りが、駅前広場・屋外ステージ、メインステージ、サブステージ、2階ホール、吹抜け、1階交流ロビー、駅前広場とループして練り歩く**こともできます。



敷地へのアクセス最大化による歩車分離と表/裏/搬入動線の分離

本敷地は西側の**一面接道**である一方で、利用者用出入口、搬入口、楽屋口、駐車場、キッチンカーの乗り入れなど、**非常に多くのアクセス**が求められます。敷地の間口を最大限に活用し、**歩車分離**を図ると同時に、**小ホールと大ホールの同時利用**の際にも、**表動線と裏動線、搬入動線を独立した形で確保**し、安全性と利便性に配慮します。

ワンストップの業務体制と設計プロセスのフレキシビリティ

大規模複合施設の設計においては、各種専門家との協業や、ステークホルダーとの折衝、地元の方とのワークショップの開催など、対話を通じた設計プロセスの中で柔軟に計画を変更する必要があります。公共プロジェクトに精通した管理技術者とランドスケープ設計担当技術者が密に連携して対応し、タイムリーに屋内外の設計を更新します。また、**パラメトリックに調整可能なボリューム**や、**表・裏動線の可変的なゾーニング**を探ることで、プログラム毎の要請や、指定管理者・テナント入居者とのきめ細やかなプランニングの調整などにも柔軟に対応しやすい計画としています。



運営エリア・時間ごとの居住域空調/照明の昼光利用制御

ホールエリアは、開演前は急激に熱負荷が高まる一方、休演時には利用者はほとんどいません。そこで、**ひだ状の建築形態**を活かし、**運営エリア・時間ごとに居住域空調**を行います。また、**昼光利用制御**により、**照明エネルギーの低減**を図ります。

テナント賃料収益の確保

レストラン・カフェはホール閉館時にも利用客が訪れやすい**駅前の屋外広場**に面して計画することで、**求心力の高いテナントを誘致**することが可能となります。**安定した賃料収益は、建築設備の維持管理に充てる**ことができます。

埋蔵文化財に配慮した敷地利用

地下躯体は埋蔵文化財包蔵エリアを極力避け、エリア上部を**屋外広場**とすることで、**埋蔵文化財に配慮**すると同時に、**全体工期への影響を避ける**計画とします。また、当該エリアはかつて千貫沢の枝沢が穿入していたことから、**周辺の地盤**よりも**軟弱**であることが想定され、ここに建築を行わないことはコストの縮減にもつながります。

